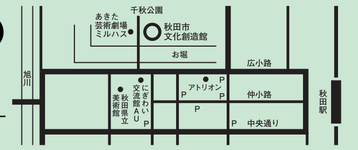
秋田 市 文化 創造 館
AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER

そう SO する SURU? ？

6号 2024年3月

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町 3-16
開館時間 9:00–21:00
休館日・火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）
・12月29日–1月3日
お問合せ Tel: 018-893-5656 Fax: 018-893-5659 e-mail: info@akitacc.jp
公式ウェブサイト https://akitacc.jp



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

PARK｜いきるとつくるのにわ 展覧会「交わるにわ、創造するキッチン」

日時：2024年1月20日（土）～2月4日（日）
会場：当館スタジオA1、A2ほか

2022年から秋田に暮らす人々やクリエイター・専門家と交わりながら、リサーチと創造活動を積み重ねてきました。展覧会ではこれまでの活動の成果を公開し、秋田の暮らしの中で培われた知恵や技術・表現が結ばれ、新たな文化の種が生み出されました。「観察する」クリエイターのアウトクロップ、身体0ベース運用法（安藤隆一郎）、わいないきょうこらが秋田でリサーチしたことに基づき制作した作品、「出会う」で開催した様々なイベントやワークショップ、「育む」で市民と育てた野菜作りや創作活動、参加者らの知恵が空間に広がりました。

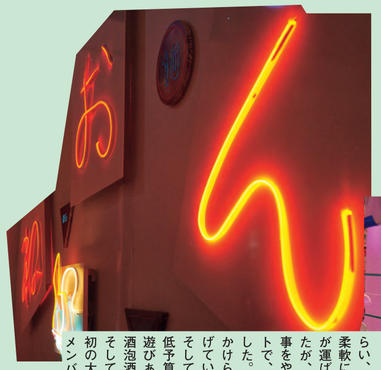
この町、シネマ。

「どうして映画なんですか」
「その理由はもう語り尽くせないほどに」
秋田市中通にてミニシアターの運営や映像制作を行うアウトクロップ・スタジオを「PARK｜いきるとつくるのにわ」の参加クリエイターに迎え、何度目かの打合せで尋ねた。確かこんな回答だったような。言葉はっきりとは覚えていないけれど、その時の「映画」であることに迷いのない話ぶりを覚えている。
アウトクロップが始めた、街と映画の関係を考えるプロジェクト『この町、シネマ。』の催しには、映画熱に溢れる参加者が多い。県外からの参加者も少なくない。参加者の言葉からは、「映画が自分達の文化である、街が自分達の居場所である」という意識が強く伝わってくる。語られている「映画」がたとえば「美術」や「演劇」に置き換わったときに、これほど多くの熱意や主体性が生まれるものだろうか。なぜ映画にそれだけの求心力があるのか、どうして映画が選ばれているのか。その所以が知りたい。
アウトクロップが制作した新作ドキュメンタリー『おかえり有楽町』の中に印象的な言葉があった。
「いろんな文化施設が整ってきている中で、映画館だけが…」
2023年に閉館した映画館フォーラム八戸の常連の女性の言葉だ。
映画館にまつわる制度については、プロジェクトの一環として実施したミニシアター3館によるトークセッションでも触れられていた。各地域に博物館や美術館を設置する法はあるけれど、映画館にはそれがないということ。
映画館は公的な機関に属さない民間の力によって発展してきた。「映画館だけが…」は公共施設としての支援や制度がない故の苦しみだけれど、一転してあの熱意や主体性は民間が継承してきた文化だからこそ生まれたものだと思う。与えられた文化ではなく、作ってきた文化だったから。
テレビが家庭に普及する以前から、秋田にも「有楽町」と呼ばれる映画館街があった。偶然にも同じエリアにミニシアターをオープンさせたアウトクロップも民間が繋いできた秋田の映画文化の担い手である。アウトクロップのプロジェクトを通して、映画や街に接するとそれが自分達の手の中にあるように感じる。自分の声や力をアウトクロップが受け取って、未来の文化・未来の街に繋がっていくような気さえがする。与えられるものではなく、作れるものなのかもと思う。人々が紡いできた文化だから、というのは私が得た解釈の一つでしかなくて、「どうして映画なのか」の答えはまだまだ不明のまま。このプロジェクトで生まれた「映画を語る場」とそこに集った人たちによる展開の先に、たくさんのその答えが見えてくることを期待して。

文：藤本悠里子（当館スタッフ） 写真：星野慧

「おかえり有楽町」
監督：松本トラヴィス／製作：アウトクロップ／2024年／上映時間：25分

「見えない物語を魅せる」をスローガンに映像制作やシネマ運営を行うアウトクロップ・スタジオが、映画を語る空間を秋田市に復活させるプロジェクト「この町、シネマ。」を実施しました。「この町」に残る記憶をワークショップやトークイベントなどを通じ辿りながら、「映画館」にまつわるドキュメンタリー『おかえり有楽町』を制作し、秋田市文化創造館、AL☆VEシアター、ミルハスで上映会をしました。



ネオ☆レトロ 盆踊り大会

懐かしくて新しい音楽と体がキラキラ。

今年は、私と「酒泡酒泡クラブ」と、新たに「エレクトロニコス・ファンタスティコス！秋田Orchest-Lab」（以下、秋田ニコス）を加え、美術部・踊り部・音楽部のチーム編成でイベントを作っていきました。
私は、運営団体の代表兼、会場装飾を作る美術部の部長を担当し、ミーティングの際は、メンバーにはやりたい事や理想を出来るだけ言葉にしてもらい、実現可能なものを残し、決して無理をせず、柔軟に理想に近づけていきました。予定通りに事が運ばず、もどかしい思いをすることもありましたが、そこは全員が素人。そして全員が一面白い事をやりたい。という気持ちと、創造館のサポートで、なんとか開催までこぎつけることができました。実際問題、運営資金的には赤字で、お金をかけられない分、各々の持ち場の精度を精一杯上げていく事に。資金繰りは今後の課題ですね。
そして当日。
低予算、発想勝ちで仕上げた会場装飾、美術部。遊びあり真面目ありの底抜けに明るい大人たち、酒泡酒泡クラブ。
そして家電楽器で盛り上げてくれた秋田ニコスは初の大舞台。
メンバーたちがあらゆる「やりたい」を全力投入したカオス空間で、誰もが日常を忘れて踊り狂う光景が誕生しました。
文字通り、みんな輝いてました。
あぁ、これってメンバーたちのための妄想実現化プロジェクトだったんだ。と感じました。お客様にも楽しく過ごして頂けたようで、「こんなイベント見たことない。」「こういう場があると、辛い事を忘れられる。ありがとう。」と涙を浮かべてお声がけ下さったりして、心からやって良かったと思いました。何より楽しかった。
これが、誰かと何かに繋がって、また面白い事が始まるといいなと思います。

文：にしかわしょう子
写真：高橋希

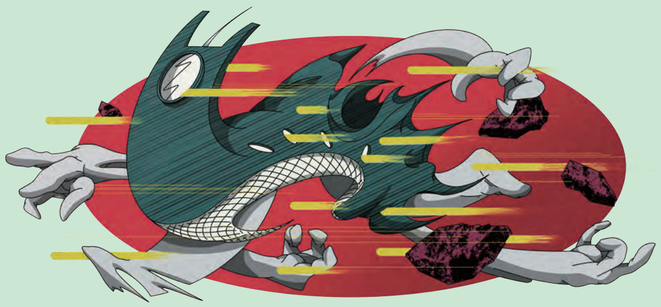
3年目を迎えた盆踊り大会。今年のテーマは「ネオ☆レトロ」でした。「エレクトロニコス・ファンタスティコス！秋田 Orchest-Lab」がブラウン管や扇風機など古家電を改造した楽器でお囃子を奏で、お酒と踊りが担当の「酒泡酒泡（しゅわしゅわ）クラブ」のメンバーが楽しむ姿につられ、子どもも大人も好きなように踊り歌いました。にしかわしょう子さんが中心となって、お菓子のパッケージや鳥除けのキラキラリボンなどリサイクル素材で会場中の装飾を制作しました。

日時：2023年11月11日（土）
会場：当館スタジオA1

AIU生が創造館にやってきた（抄）

11月17日金曜日、国際教養大学（AIU）国際教養学部グローバル・スタディズ領域の工藤尚悟先生が授業「関係人口論」の一環で、学生を連れて創造館を訪問。芦立さやか（当館ディレクター）と三富章恵（NPO法人アーツセンタあきた事務局長）が質問に答えました。

工藤先生 何か質問はありますか。
学生 文化創造館がチャレンジの機会、新しい価値を作り出す場所であるというのは、最初からそういう場所にしようと決めていたのですか。
芦立 美術館やコンサートホールなど、完成されたものを見る場所は他の施設にあるけれど、何かわからないもの、見たことのないものに関わろうとするのは、文化創造館ならではだと思います。秋田市から創造館をこういう場所にしてくださいと業務仕様書で示されているのですが、それに応えていくために、創造館には一人一人が何かを生み出す力とそれを楽しむ余白が必要だと私は考えます。それはすなわち「アート」という言葉に置き換えられるかもしれない。ここで言う私の思う「アート」とは、単なる絵や彫刻ではなくて、何かを自分の視点から生み出す力、問いかける意識から新しい価値観を生み出す力のことです。
学生 誰もが自由に集まる場所、いろんな人たちが同じ空間で干渉しあい譲りあっている場所というのは特別でユニークなものですね。
三富 最近は県外で講演することも増えていますが、「地方だから」「秋田だから」と問われることが多いです。私達は、日々、この状況、この立地、いろんな人がいる環境で何ができるかを必死にやっていて、「地方だから」「秋田だから」を意識しているわけではありません。でもやはりそれを言語化できなければと思うようになりました。ひとつ思いつくのは、今はご高齢で趣味的な活動を続けていらした方々が、次の世代に継いでいきたいという意識を強く持っていらっしゃること。もちろん自分たちの代で終わってもいいと諦めている方もいますが、そういう方たちが創造館ではオープンマインドな精神で、次の世代と出会い、引き継がれ、新しい広がりが起こっていく。
学生 仕切りがない空間ということで、実際に出会って何か新しい事業に繋がった事例がありましたら教えていただきたいです。
三富 以前LGBTQ+のAkita Pride Marchのゴールが創造館になったことがありました。参加者が交流するために1階のコミュニティスペースを借りていただいて。お菓子やジュースを配って、ワイワイ。それを見ていた1階でずっと勉強していた男子高校生のグループが、お菓子をもらいにそのプライドマーチの中に混ざっていって、言葉を交わしていたんです。お菓子に釣られたのかもしれないけれど、一瞬でも空間を共有したことで、もしかしたらこの男子高校生のグループに、何か影響を及ぼすことにならないかなと、わくわくしながら思っていたんですよ。
芦立 もう一つ思い出したのが、俳画協会が1階で展示を行っていたときのできごと（前ページ参照）。その日、屋外ではスケートボードを普及するためのイベントを開催していたのですが、雨が降ってきたから急きょ俳画協会の方に許可いただき、館内に移動しました。ストリートダンスをやっている幼稚園から中学生くらいの子どもたちが、俳画協会の展示のすぐ横で、大音量の音楽をかけダンスしている状況が生まれて。俳画協会の皆さんがその状況を許容し、さらに喜んでいたのが印象的でした。さらに俳画協会の体験コーナーに、そのダンスの子どもたちが混ざっているというようなことも。
「カタルバー」というものもありまして。少人数で始められる1時間の企画ですけども、そういったこじんまりとした場で語る場を提供しています。哲学的な問い、作品制作で悩んでいる、映画が好きだから一緒に語れる仲間が欲しいとか、テーマは何でもいいんです。そこに参加している方々が意気投合して、別の日に屋外で一日店主を一緒にやった。その場の話が展開して、仲間が増えていくこともありました。
学生 この土地は、出る杭は打たれる、出る杭を排除しようとする傾向もあると思います。文化創造館の価値観を定着させていくのに工夫している点、逆に何か直面した課題はありますか。
三富 いろんな戦略を組んでいるんですよ。家族が休日に楽しめるような企画もやるし、もっと勉強したい人のための企画もやるし、バリエーションに配慮しています。また、地元のマスコミに協力いただいて、どうやって情報を広げるかも意識しています。スタッフがラジオに出るなど。秋田で暮らしているとどこかで創造館の情報に接するようにしたいと思っています。
芦立 創造館のスタッフは20人近くいます。20人の出自、経験、関心はみなそれぞれ違う。違うからこそ、多種多様な企画が生み出され、誰かにヒットする状況・企画を生み出せたらいいですね。そして工藤先生もそうですが、やはり秋田出身の方が抱えている切実な思い、課題意識もある。スタッフはコーディネーターという役割である以上、何かを繋ぐ架け橋になることを意識して働いてもらいたいと思っています。違うことがおもしろい、それが繋がるからおもしろい。失敗の美学ではありませんが、やってみて駄目だったらそこをどう次に生かしていけるか考えるのが好きだし、恐れずに、一つ一つちゃんと丁寧に向き合っていきたいです。
学生 お二人が自分でやってみたいイベント企画はありますか。
三富 秋田にお住まいで、個人で60万点ほどの民具を蒐集されている油谷満夫さんという方がいます。油谷さんの集めたものがこれからちゃんと評価されるようなことがしたい。コレクションのそれぞれの価値を深掘りしていくことができたら。
芦立 何かを作っている人が常に館内にいる状況は生み出していきたい。人が何かを作る、クオリティなど関係なく生み出す力は素晴らしいなと思うので。秋田の人に限らず、県外もしくは海外も含めていろんな人が自分のやりたいことができて、さらに交流を生み出せたら。あとは自分自身、子育て世代なので、子どもが1人で来ても勝手に遊んでいる、迷惑にもならないような環境を生み出されたらいいなと思っています。
日々の利用者との対話から何かが少しずつ変わっていくのだと思います。すぐに結果や答えが出てくるものではない。10年後20年後に振り返ったときに、もしかしたら文化創造館ができたあたりから何かが変わった、誰かがそういうふうに思ってくれたらすごく嬉しいな。
学生 ありがとうございます。
工藤 僕もいいですか。話の最初に「アート」という言葉が出てきて、それを秋田で押し出す意味について言及がありました。教養大も「リベラルアーツ教育」を掲げている。創造館を運営しているのも「アーツセンターあきた」ですね。ここでの「アート」や「アーツ」の意味しているものはどんなことでしょうか。ぜひ自分なりに調べてみてくれたらと思います。



グラフィティ：牧野心士（当館スタッフ）

翌る日も、古くなっても、ひたすらに新しく。

毎日変わっていく創造館。
ものすごいスピードで、
知らない場所へ冒険する乗り物のように、
訪れた人を乗せて、どこまでも。

デザイン：服部一成 榎本紗織 編集：熊谷新子

「そうぞうの木」から収穫しました。

「将来、あなたがあきたのまちで実現してみたい活動はなんですか？それは誰と、どんな場所で行いたいですか？」創造館1階のフリースペースには、新屋海岸の流木を用いた、かえるくん作の〈そうそうの木〉があります。訪れた人が思い思いに描いた「こんなことしたい」「こうあったらいいな」というイメージが短冊状のカードに記され、木の枝に吊るされて、日々増えていきます。

「みんなで作品が作れるスペース」「雲が食べられるといいな」「許容ができる町になってほしい」「秋田の特別な文字を作りたい」などなど。集まったアイデアを収穫しながら描かれた内容を読み解き、みなさんの思いをそうぞうしています。

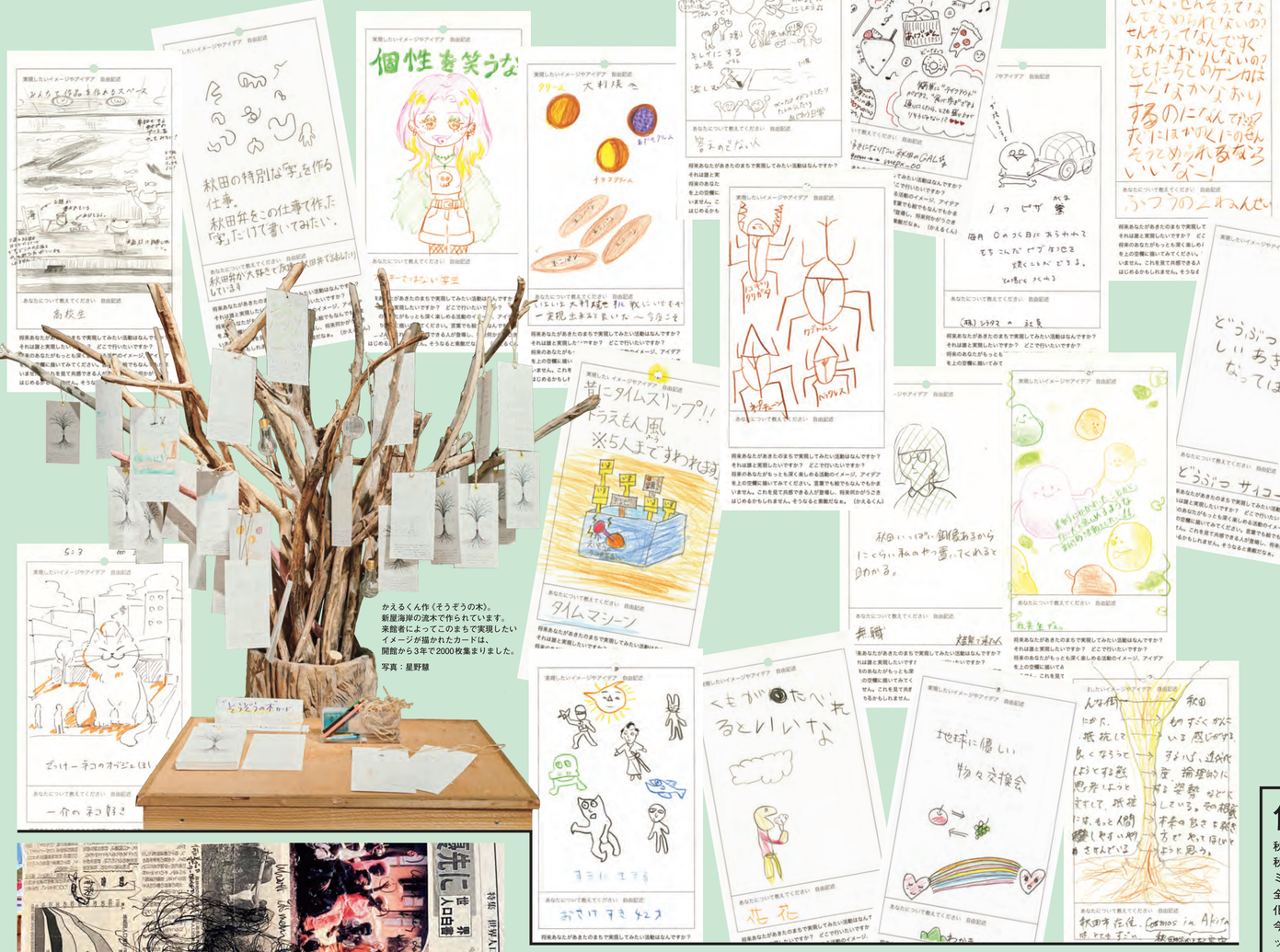
「やってみたい！ことある？」という問いに対して、「〇〇してみたい」「〇〇へ行ってみたい」と答えるコミュニケーションがありますが、その人となりや背景、趣味趣向を把握して受け取る言葉と、全く知らないまま受け取る言葉とでは、受け取り方が変わってきます。

〈そうぞうの木〉に成っているメッセージは匿名です。描いた人のことをそうぞうさせます。

カードを媒介することで、人の心をそうぞうさせる、伝言ゲームのようなコミュニケーションが〈そうぞうの木〉によってもたらされ、別の新たな創造性が生まれています。描いた人の本意を確かめる術はありませんが、1枚1枚にしっかりと載せられたメッセージは、なんだかじんわりと響くものがあるのです。

「文化ってなに？」「創造ってなに？」という問いの答えははっきりしませんが、匿名の個人のポッと出たつぶやきみたいなものを見逃さず、受け止めることを文化創造館は大事にしたいと思っています。このような、皆さんの中にあるアイデアの種や普段モヤモヤと考えていることを可視化し、クリエイションに変えていける場です。自分たちが住むまちでこんなことを実現してみたい。まちや人がこんな風になったらいいな。を「そうぞう」してみてください。今より少し楽しく、住みやすいまちになるかもしれません。

文：岩根裕子（当館スタッフ）



かえるくん作〈そうぞうの木〉。新屋海岸の流木で作られています。来館者によってこのまちで実現したいイメージが描かれたカードは、開館から3年で2000枚集まりました。
写真：星野慧

かえるくんの予定帳

「かえるくんの夢はなに？」
「将来どうなりたいのの？」
その言葉を聞くたびになんだか苦しくなる。
未来のことなんてわからない
未来は体験したことがないから
未来がどうなるのかなんて、誰にもわからない
ある時、出会った八十郎という老人に
未来のつくり方をおしえてもらった
「予定を入れればいいんだよ・・・って
「予定帳に予定を書き込めばいいんだ」
「自分に大切な予定を・・・ねっ」
それからかえるくんは予定帳を持つことにした
おなかの粘膜にスッと溶け込む不思議な予定帳
予定帳には大切な、特別な予定を書くことにした
明日のこととか、少しだけ先のこととか
簡単に思いつくことだけ書くことにした
大好きな人に会いにゆく予定
大切な場所にゆく予定
一人きりで静かに過ごす予定
まだやったことのない予定
予定をいれはじめてから
退屈だと思っていた時間がなんだか少し輝いた
そしてもうひとつ、気づいたことがある
自分が少し変わったかも
たくさんの人に会えた
たくさんのところに行けた
自分の時間を大切にできた
できることもいろいろ増えた
予定を入れた分だけ
それが終わると過去が増える
自分の過去をつくることができた
未来を作る唯一の方法
それは予定をいれること
ういろいろ予定を入れること

文：かえるくん（館長代理）　絵：藤浩志（館長）

Aokidと「あときとた」

つまりAokidプロジェクトそのことを書こうとすると、おそらく普通というか、これまでの書き方にはならないだろうなとは思う、Aokidさんが言っていたしりとり（Aokidさんはさまざまなタイミングで「しりとり」と言っていた。そのことを推測して書く）、しりとりはいわゆる、りんご、ごりら、らっぱ、、、のしりとりだけではなくて連想ゲームのようだ。例えば空、鳥、島、嶋、しましま、しまうま、サバンナ、ライオン、太陽、赤、信号、青、GO、郷ひろみとか。色々つながっていく。つながり、てをつなぐ、手の平、拍手、卒業式とか。どんどん広がっていく、風景が、目線が目の前の壁から、宙返りして、上のライトと目を合わせて、その光をなぞると手が動く、手が動くとそれは何かを掴んでいるのか、誰かのあばあちゃんの肩を思い出して、ここは田舎のおばあちゃんの家になる。線香の匂いがして、網戸に虫たちが蠢いている。それは常に「ここ」を意識、射抜きつつも、ここではないところに想いを馳せるように広がっていく行為だ。

それはまっすぐとも言えるし、ジグザク、放射線、注意散漫とも言える。だから普通には書けない。おそらく、Aokidさんがダンスを踊る時の意識がそうなのではと思うが、それを確かめることはできないし、もちろんそれだけではないだろう。ただ今回の参加者の中に何か別の何か（つながり）が生まれていた。それは目に見えるようなわかりやすいつながりではない。ただしっかりとつながるというか、一つでもあるし、全体でもあるような感覚（どうでしたか？）

ここ（この土地）で生まれたこととか、言葉とか礼儀とか年齢とかもどうでも良くなった。音楽も歌も身振りも全部等しくなって何かそれらが許されているということ。それは決して忘れてはいけない、と、思った。集中できないのではなくて、没頭すること。

Aokidさんのそのスタンスでみんなの身体が自由になったけれど、その自由を拡張、広げたのもみんな、参加者の方々であるということはちゃんと言いたい。

こうやって書いていても文字と頭がずれていく、この事務所のあらゆる風景が見えるし、聞こえる。

（Aokidプロジェクトは2023年8月から始動、ワークショップ等を重ねて、12月に大発表会「うあー」を開催。終了後も参加者を中心に活動が続いている）

あわせて、このプロジェクトで特徴的だった「あつまる」という行為、それは、何かを見にいくためにとか、なになにのためにに、という「ために」からは逃れている、その逃れ、偶然がきっと新たなものを作る。

私からしてみたら、それは赤信号が青信号になって人が離れ離れになるかのように、寂しい約束だけど、でもそのことを、そのことが大事なのでは？

文：島崇（当館スタッフ）
写真：伊藤靖史

Aokidプロジェクト「あときとた」
2023年当館に集まった人たちと「〜になる」をテーマにトークイベントやワークショップを開催したプロジェクト「〜になるためのトライアル」の一環で、ダンサー・アーティストのAokidを招きました。秋田に暮らす人々やクリエイターと共にワークショップを重ね、新作公演を発表。当館のみならずストリートや公園などまちの様々な場所で、自分たちの身体表現を模索しました。

期間：2023年8月〜12月
会場：当館スタジオA1ほか

いろいろな料理を作れるようになりたい

きっかけは一枚のカード、「たくさんのりょうりをつくれるようになりたい」から始まった。

まずは、「献立会議」を開催。素敵な名前だ。具体的なメニューを決める前に「なぜ作れるようになりたいのか」を考える。

例えば、「結婚当初はお米の炊き方もわからなかった。今も料理に苦手意識があるから、成功体験を味わってみたい。」

「食べることよりも、調理の過程で試行錯誤を繰り返すことが楽しい。なんなら失敗したい！」

失敗したい人、失敗したくない人。

もっと切実な思いもあった。

「健康診断で尿酸値が高かった。この先の人生を考え、健康的な料理をつくれるようになりたい。」彼は料理を通して、「健康になりたい」を叶えようとしていた。メニューは米粉麺を使ったサバパスタに決まった。

その他にも、成功体験を味わうための「焼豚」、失敗するための「マカロン」、酵素玄米に合う「厚揚げのチャンプル」、秋田を楽しむための「とんぶりパスタ」、キッチンカーで販売したい「カレーきりたんぽ」、それぞれの目的を達成するためのメニューが決定した。

会議から約1か月後、実践編となる料理会を開催。いわゆる料理教室と異なるのは、先生という立場の人がいないこと。だからこそ、玉ねぎの剥き方を教えたり、足りない調味料を補ったり、協力しながら調理をしていく。カレーを煮込む隣でマカロンを焼く。作るメニューは異なるが、それぞれに目的があるため奇妙な一体感さえも生まれていた。

出来上がった料理はどれも美味しかった。しかし、それ以上に「目的を達成できた。今日作った料理を、自分のレパートリーに追加したい！」という声が上がったのが、何よりも嬉しかった。

文・写真：白田佐輔（当館スタッフ）

▲秋田が好きだという園部美晴さん。「秋田の食材を使って、もっと秋田を楽しみたい！」という目的から参加しました。「山菜パスタ」と「せりとカニカマ和え」の2品を調理。「本当はとんぶりを使いたかったのですが、この時期は販売してなかったので。でも、せりの新たなポテンシャルに気づけました。」（園部さん）

▲武田忍さんが作ったのは「酵素玄米の献立」。将来的に酵素玄米を使ったカフェを開きたいという目標がある武田さんは、他の参加者にも相談し、いくつもの料理を作りました。厚揚げのチャンプル、キノコの白菜煮、切り干し大根、にんじんサラダ。

◀普段は全く料理をしない木内颯太さん（奥から2人目）。この日は、キッチンカーで販売する「カレーきりたんぽ」なるメニューにチャレンジしました。いきなりの調作料理で、皆さんに心配されながらも、無事に作り上げることができました。「大成功でした！自分もカレーを作れるんだと自信につながりました。」（木内さん）

プロジェクト「〜になるためのトライアル」の一環として、文化創造館に届いた声のひとつ「料理をつくれるようになりたい」を実現しました。

第1回 献立会議
日時：12月3日（日）、6日（水）
会場：当館 1F コミュニティスペース

第2回 実際に作ってみる
日時：12月20日（水）、1月10日（水）
会場：当館 1F コミュニティスペース（キッチン設備）

俳画協会の皆さんとの3年

秋の風が頬を刺す10月半ば。全日本積穂俳画協会秋田教室の第39回俳画作品展が文化創造館1階コミュニティスペースにて開催されました。

全日本積穂俳画協会秋田教室さんは、開館時から文化創造館が活動を応援してきた団体さんです。

今年度は、展示方法や作品の魅せ方をよりパワーアップすることを目標とし、普段アーティストとして活動している大平真子さんを外部サポーターとして迎えて、展覧会会場の構成を秋田教室のみなさんと考えていきました。

俳画は、俳句が添えられた簡略的な絵です。筆、顔彩、和紙、墨を使い、「濃淡」「ぼかし」「かすれ」の技法を使い描きます。自由に描いて良いわけでなく、モチーフや構図はお手本があり、書き順も決まっています。描く様子は絵を描くというよりは、習字に近いのかもしれません。素朴でややわらかなほっこりとした印象とは裏腹に、色の重なりや余白の大きさなどが緻密に考えられているという点がとてもおもしろいところです。

作品展では、額装された基本の作品やのれんやタペストリーなどの布の作品が並びました。白い大きな壁一面には、無数の折り鶴が大きな太陽に向かって飛び立つインスタレーションのような作品も。教室に入って間もないメンバーが練習として描いた半紙も1つの作品として展示されました。「描く過程が面白い。そこを見せた方がより興味を持ってもらえるかも。」という大平さんの提案から、描く過程を定点で撮影した映像作品も会場に投影。夜は、たまたま通りかかった人にも作品をみてもらいたいと、屋外デッキに絵付けをした灯ろうとイルミネーションを設置し、文化創造館をやさしく照らしていました。

映像を通して描く過程を来場者に知ってもらうことで、より「俳画を描くこと」を身近に感じられる展示となったように思います。これまでしてきた展示の雰囲気を崩しすぎず、俳画の親しみやすさを第三者の視点から引き出してくださった大平さんに感謝です。

次年度からは、文化創造館の活動支援のあり方が少し変わり、活動に「伴走する」支援は無くなってしまいます。なんだか寂しい気持ちもありますが…新しいことに戸惑いながらも挑戦することを恐れず、変化に身をまかせることができる「強さ」が、全日本積穂俳画協会秋田教室のみなさんにはあると私は感じています。だから、もう大丈夫なのだとも思っています。これまでの経験を生かしながら、みなさんらしく、活動が続いていくことを陰ながら応援しています。

文：齊藤夏帆（当館スタッフ）

「第39回 俳画作品展」
日時：2023年10月13日（金）〜15日（日）　会場：当館1Fコミュニティスペース　主催：全日本積穂俳画協会秋田教室